

成田龍一著
『戦争経験』の戦後史
——語られた体験／証言／記憶——

人見 佐知子

一、本書の内容



本書は、二〇〇五年から翌年にかけて出版された『岩波講座 アジア・太平洋戦争』（全八巻）で発表した先行論文の問題意識を継承し、戦中から戦後にかけて「語られ描き出された」アジア・太平洋戦争についての「意識や認識の軌跡」を追跡し、「推移するその様相を具体的に記述」したものである。また、「戦争の経験を問う」というシリーズの一冊として、このシリーズの枠組みを提示するという重要な役割も担っている。

本書の性格をひと言でいい表すならば、高橋三郎『戦記も

の』を読む⁽¹⁾、吉田裕『日本人の戦争観』⁽²⁾、福岡良明『戦争体験』の戦後史⁽³⁾、野上元『戦争体験の社会学』⁽⁴⁾などの系譜に位置づく戦争の「語り」の歴史的研究である。本書の構成を示しておく。

序章 「戦後」後からの問い

- 1 問い直される戦争と戦後
- 2 戦後における戦争の語り
- 3 問われる戦争像
- 4 「戦争体験」から「戦争経験」へ

第一章 「状況」としての戦争（一九三一—一九四五）

- 1 中国での戦争
- 2 一二月八日の転換

第二章 「体験」としての戦争（一九四五—一九六五）

- 1 「体験」としての戦記
- 2 「体験」としての「引揚げ」と「抑留」
- 3 「公刊戦史」と「通史戦史」
- 4 帝国—植民地と銃後
- 5 歴史学の「太平洋戦争」

第三章 「証言」としての戦争（一九六五—一九九〇）

- 1 書き換えられる「戦記」
- 2 あらたな「引揚げ」記、あらたな「抑留」記

- 3 あらたな世代の「証言」
- 4 加害の戦争認識
- 5 「証言」の時代の歴史学

第四章 「記憶」としての戦争（一九九〇—）

- 1 「記憶」の時代のはじまり
- 2 「記憶」の時代の戦記・戦争文学
- 3 「記憶」の時代の帝国—植民地

おわりに

構成が明示するように本書は、戦中—戦後を四つに時期区分し、それぞれの章でその時代を代表する出版物を紹介し、特徴を明らかにするという手法をとる。

序章では、本書の基本的な分析枠組みが提示される。まず、アジア・太平洋戦争の「時間的な屈曲と空間的な拡大」という歴史過程を問題とするために、時間と空間の枠組みを問い直し、再設定する必要を提起する。時間的には、「戦後」に先行する「戦時」が「戦後」の「語り」を規定してきたという問題意識から、「アジア・太平洋戦争」とよばれる戦争の「渦中」を「語り」の分析の出発点としているのが特徴である。「戦後」の「語り」における、戦争への認識の推移と叙述の時期ごとの特徴をより明確に浮かび上がらせるための仕掛けである。

空間的には、これまでの「語り」において植民地認識が極め

て乏しいという課題意識から、「戦後史としての植民地認識の系譜」をたどることをひとつの論点としている。

さらに本書が提示する重要な視角として、「戦争体験」の上位に「戦争経験」という独自の新たな概念を位置づけたことがあげられる。歴史学的な用語としてはいまだ耳慣れない「戦争経験」とは、体験／証言／記憶によって構成されると著者はいう（後述）。

第一章では、戦後に先行する「戦時」＝「状況」としての戦争の語りが検討される。戦闘の時間的屈曲・空間的拡大によって戦争自体が変化するなかで、戦争像も変化することが明らかとなる（とりわけ、日中戦争の開始＝一九三七年と太平洋戦争の開戦＝一九四一年の劃期性が強調される）。軍部による統制を背景に、整序され統一された戦争像の記述が「状況」の時代の「語り」の特徴の第一である。公的で支配的な言説は戦争遂行そのものであり、戦争の全容にはたどりつけないがゆえに、「語り」には「戦争の当事者」として現在進行形の出来事＝「状況」を記述するためのさまざまな工夫がほどこされるのも、この時代の「語り」の特色である。

第二章では、敗戦後の、「戦時」とは区別された「戦後」、すなわち「公」の支配的な論調が戦争の否定に転換したことをうけて、「戦時」の「語り」の否定が「体験」の時代の出発点とする。ここでは、「自らの戦場や植民地での経験を、同じ経験

を有する人びとに『体験』として伝える」ことが経験を語るうえで
の眼目となる。他方、歴史学では、「戦争の全体的・総体的な把握」
がめざされた。それは、(戦前の、体制に翼賛した歴史学とは一線を画し)、アジア・太平洋戦争に関する「史実」の提供
を行うという問題意識に支えられていた。「体験」の語りの中核をな
していた戦闘の様相にはほとんど触れず、国際関係のなかでの日本と東
アジア、政治家と軍部、社会運動の動向を軸とした記述は、植民地
にたいする認識の希薄さなどの問題は孕みつつも、戦時においては人
びとに充分提供されなかった戦争をめぐる事態を克明に記すことに努
めた結果である。

第三章では、なんらかのかたちで体験者であることが当たり前であ
った時代に経験を共有した人びとに向けられた「語り」から、その共
有がない(「戦後」に生まれた)世代への語りへと移行する「証言」の
時代の「語り」が分析の対象となる。時代背景として、戦後世代の
台頭があり、また、冷戦体制やベトナム戦争がかつての戦争観や戦
争像に変化をもたらしたことが指摘される。被害者意識にとどまら
ず、加害者としての戦争認識が登場し、また、空襲や銃後、満蒙開拓、
強制連行あるいは「引揚げ」や「抑留」といったあらたな問題群も出現
する。これらは、「経験を共有する不特定の相手に語るのではなく、相
手を特定し、自らの経験をその関係性のなかで語る」という点で、
新たな「語り」Ⅱ「証言」の時代がスタートしたことを意味

した。さらに、「証言」を用いた歴史叙述の出現は、この時代の歴史学
をより幅広く充実したものとした。

しかしながら著者は、「証言」の時代の歴史学が犯した過ちを見逃さ
ない。すなわち、「証言」は狭義の「事実」にのみ利用され、「経験の固
有性やそれが当事者にもつ意味」については顧みられることなく、
それらを単なる「歴史の一コマ」に押しとどめてしまったという批
判である。これは、聞き取りは語り手と聞き手の多元的・往復
的な実践であるという現在のオーラル・ヒストリーの水準に自覚
的なものにとつては至極まっとうな指摘である(5)。しかし、文字資
料と口述資料の資料としての「平等」がいわれるようになった今日
でも、「文字資料では分からない話の細部」(6)を聞き取るこ
とへの期待のなかには、やはり狭義の「事実」への拘りと歴史家の
「事実」への飽くなき欲求がみてとれる。かかる状況を顧みれば、
「証言」の時代に向けられた本書の歴史学への批判は現在におい
てもいまだに意義を失わない。本書は、戦後歴史学への批判の書
という趣も併せもつ。

第四章では、「記憶」という語が従来とは異なる意味合いを込
めて使用されるようになった一九九〇年代以降を取り上げる。冷
戦体制が崩壊し、あらたなかたちで戦争と帝国―植民地をめぐる
問題が相次いで登場したことをうけて、専門領域と国境を越えて
戦争の「語り」のもつ政治性が問題となり、「歴史

認識」をひとつの焦点としながら展開するのがこの時代の「語り」の特徴である。とりわけ、「従軍慰安婦」問題に代表される日本帝国の植民地領有に対する責任―「植民地責任」が厳しい告発に晒された。

おわりにでは、この「植民地責任」と「戦争責任」を包括する概念として「帝国責任」(かつての大日本帝国としての歴史がもつた責任)および未だ決着することのない「戦後・日本がもつ責任の総体」を提示し、あらためて「戦争経験」の議論を考察することの必要が提起され、本書は締めくくられる。

二、疑問点

このように本書は、体験／証言／記憶を軸に「戦争経験」の語りがよく整理されていて、かつ緊張感をもって議論が展開されるため読者は容易に内容に入り込むことができる。にもかかわらず、読後にはいくらかの違和感も残った。以下では、読後の違和感について筆者の関心にそって述べてみたい。

第一に、「戦争経験」という新たな概念の提示についてである。著者は、「個別に存在する戦争体験を、他者にも通じる『戦争経験』とする」ため、すなわち、体験の共有のためには「戦争経験」という概念が重要であることを主張する。その際、

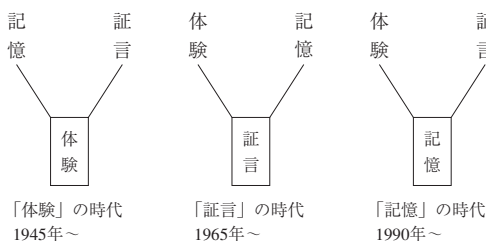


図 体験／証言／記憶の三位一体 (本書19頁から転載)

高度成長のただなかで「体験」が横行することを嘆き、体験に還元することのできないさまざまな経験に着目する必要を説く藤田省三氏(一九二七年生まれの思想家)の議論を引き合いにして、「体験の経験化」を議論の遡上にのせた。

しかし、このことで著者は本書でみずからが提示した「戦後の過程を踏まえた」戦争体験の戦後史を否定する過ちを犯しているような気がしてならない。それは、藤田省三氏の議論が、著者のいう「証言」の時代においてなされたものであるという点とかかわる。

藤田氏は「証言」の時代に「体験」の横行を嘆いているのである。著者のいう体験／証言／記憶の三位一体が織りなす「戦争経験」とは、図のように三者の関係が変化し統御する主たるものが交替する事象として把握される。たとえば、「体験」の時代は、「体験」が証言と記憶の概念を統御する。「証言」、「記憶」の時代も同様である。藤田氏の議論は「証言」の時代における「体験」の優位を批判しているのではないのか。

おそらく、藤田氏の主張は、高度経済成長期をへての戦争体験をめぐる世代間の軋轢を背景としている。戦争体験を持たない世代が年長者の体験の語りにも反感を抱き、年長者は若者の態度にいらだちを覚えていた。こうした時代背景を抜きにして戦争体験を位置づけることはできないというのが著者の主張ではなかったか。だとすれば、藤田氏の議論を敷衍して、「体験の経歴化」を通時的課題とするのはみずから描いた「戦争体験の戦後史」を非歴史化する行為とはならないか。

そもそも、体験／証言／記憶の概念についての説明は自明のごとくになされない。本書の内容から推察されるのは、体験／証言／記憶を区別するのは「語り」の担い手と聞き手の変化である。もしこの推察がただしければ、体験／証言／記憶に、議論の整理のための便宜上のラベル以上の意味を見いだすことは困難である。著者の目指す体験の共有化のためにかかる整理が有効とは即座に思えないのである。

さらにいえば、「語り」を体験／証言／記憶にもとづいて整理したがゆえに、戦後の「語り」がもっていたそれぞれの時代における個性や豊潤さが平板化してしまった印象さえ抱いてしまふ。

いったい、体験／証言／記憶とはいっても、体験は体験の瞬間に記憶となり、その「語り」は証言となる。体験／証言／記憶による「語り」の整理は、それぞれの体験の固有性や当事者

性を翻案する過程にも思われる。

第二に、第一の点とも関わるが、「記憶」という語が従来とは異なる意味合いを込めて使用されるようになった一九九〇年代以降と以前を、同様の「記憶」の概念で整理し位置づけることは可能なのだろうか。また、「戦争経歴」が「記憶」から「歴史」（二七五頁）にといった場合の「記憶」は、従来の意味での「記憶」を指しているようで、著者のなかで「記憶」の概念の使用方法は曖昧である。

「記憶」の時代の記述が分量的に薄いのも残念に思われる。

第三に、本書が取り上げた「語り」の代表性の問題である。本書が取り上げた作品の多くは、知識人によって書かれた「戦争経歴」である。個々人の膨大な体験記はここでは無視されている。たとえば、体験者による膨大な記録が存在する「学童疎開」については取り上げられないなど、ここで取り上げられた「語り」の代表性には疑問がある。

また、「引揚げ」「抑留」「沖縄戦」といった独立した主題となりやすいものが取り上げられており、そこからこぼれおちた「戦争経歴」への言及がない。少なくとも、たとえば注で「復員」についての「語り」が少ないことが触れているが、なぜ独立した主題となりにくいのかについての考察があればよかった。

さらに、歴史認識や戦争像の形成に大きく関わると考えられ

る教科書について触れられていないことも腑に落ちない。戦争観や戦争像の形成に大きく関わったと思われる家長三郎氏の教科書訴訟については注で触れられているのみである。

おそらく、著者は著者なりの意図があつてこれらの作品をとりあげたのだと思う。「戦争経験」を論理的に整理するために困難な「語り」は意図的に除いたのではないかといった無用な非難を避けるために、代表性の問題についての言及が欲しかった。

これに関連して、これらの「語り」を受容する側の視点の欠如が気になった。それぞれの時期の「語り」がどのように受容され人びとの戦争観の形成に影響したのかの検証は、戦争像の形成と密接不可分ではないか。このことは、本書の主題のひとつである戦争を軸とした「主体」の形成にも深く関わる問題である。「語り」＝戦争像ではあるまい。前出の藤田氏の議論は「語り」の受容をめぐる「証言」の時代特有の状況と、筆者にはうつる。本書の主題に即せば藤田氏の議論は、戦後歴史学における「主体」の形成といった観点から位置づけられるべきではなかったか。

戦後における戦争体験の「語り」は決して一様ではない。それゆえに戦争体験論の系譜を作成することにもなう困難は計り知れず、それを成し遂げた著者の手腕には敬服せざるを得ない。かかる本書への書評が、評者の理解不足から、単なる揚げ

足取りに終始してしまつたのではないか、見当違いの批判を行つてしまつたのではないかと懼れるばかりである。著者ならびに読者のご海容を請い、拙い書評を終えたい。

(四六判、三二八頁、二九四〇円、岩波書店、二〇一〇年二月刊)

註

- (1) アカデミア出版会、一九八八年。
- (2) 岩波書店、一九九五年。
- (3) 中央公論新社、二〇〇九年。
- (4) 弘文堂、二〇〇六年。
- (5) 歴史学研究会「小特集 方法としての『オーラル・ヒストリー』再考——オーラル・ヒストリーへの接近」『歴史学研究』第八一―号、二〇〇六年、同「小特集 方法としての『オーラル・ヒストリー』再考——オーラル・ヒストリーの実践」『歴史学研究』第八一―号、二〇〇六年など。
- (6) 中村政則「昭和の記憶を掘り起こす」小学館、二〇〇八年、二六五頁。
- (7) 藤田省三「戦後の議論の前提」『思想の科学』一九八一年四月。

(ひとみ・さちこ／日本近代史)